路並びに其地理的要因を說き、現況を詳細に論述してゐる。「琅玕考」（新村出博士）琅玕に對する支那古來の諸說、語原的解釋、琅玕材の色及び其用途、並びに歐米の東洋學者が琅玕に下せる諸種の譯語に就いて考證したもの。「港市としての坂本」（中村直勝）瀨戸內海、淀川、琵琶湖を結ぶ水系の我國文化發達上に及ぼせる重大なる意義と坂本との關係、平安末期・鎌倉初期の關所の設定に伴ふ關錢の徵收と之を避ける方便として坂本港の繁榮、延曆寺と坂本との關係、信長の出現に依り坂本は港市より城下町へ進展せんとしたこと等に就いて論じてゐる。「陽明詩」（高瀨武次郎博士）王陽明の詩の解釋「賈魏公年譜」（內藤虎次郎博士）賈魏公の年譜を作製したもの。「ペトルス・アピアヌスの『コスモグラフィア』最初の諸版について」（小野鐵二）ペトルス・アピアヌスの略傳と學問上の位置、著書「イサーゴーゲ」「デエクラーティオ」の說明ランツフート版の「コスモグラフィア」初版（一五二四年）に關する地名、地圖等の詳細なる記載、右の異本三種、次いで出版された諸種のアントワープ版其他に就いての比較考證である。「九州地方聚落の人口地理的考察」（石橋五郎博士）行政區別的觀察、自然環境の影響、人文事象との對應に就いて論じ、過去に於ては此地方は人文的影響が聚落の人口構成上に重大であつたが、今日では寧ろ自然的影響に因り其多少が決定さるこを幾多の例を引き說明してゐる。

以上二十六篇、限られたる紙面、吾人の淺學菲才、以て充分なる紹介を試みるこの出來ぬは甚だ遺憾とする所であるが、何れも斯界の權威が小川博士の德業を慕ひ寄せられたる金玉の名篇、本書の刊行は學界を益すること頗る甚大なるを確信し、敢て世の學徒、讀書子に薦むる所以のものである。（京都弘文堂發行、價拾圓）〔太田〕

◉滿鮮地理歷史研究報告第十二

大正十五年九月第十一冊を出してより以來久しく刊行を見なかつたが今度更に第十二冊に接するを得た。收むる所四篇、其一「曹魏の東方經略」（池內宏氏）は幽州刺史毋丘儉の名に依つて名高い魏の高句麗征伐の經過と其征

伐に關聯してかういふ大規模の經略の行はれたことゝを闡明するもので、更に第二回の戰役に於ける王頎の行動樂浪帶方二太守の濊經略、挹婁及び夫餘に對する王頎の遠征に及び、三國以前殆んど全く不明であつた滿洲方面樣子を今日龍志の記事から窺ひ得る點に於て意義深き此遠征をこいて餘す所なく、附錄として載せられた「毋丘儉の高句麗征伐に關する三國史記の記事」は此征伐の年代に當る麗紀東川王時代の記事が史的價値に乏しき事を明にし末尾の圖版「毋丘儉紀功斷片拓本」は地圖「曹龍の東方經略參照略圖」「通化、懷仁、通溝地方略圖」と共に理解を助け、其二「高句麗滅亡後の遺民の叛亂及び唐と新羅との關係」(同氏)は唐側並に新羅側の史籍の記載を檢討批判しつゝ、新羅が麗濟兩國滅亡後鉗牟岑の反亂及び其餘黨の亂を幇助して唐の勢力を半島より驅逐するに力め唐の領有する百濟の故地を略取し其半島領有の念を斷たしめ安東都護府を移轉せしむるに至つた經緯を考察したもの、次の「兀良哈三衞に關する研究」(一)(和田清氏)華やかな元代を過ぎた後、清氏以後の雌伏期に入る前の明代蒙古が未だ未研究の狀態にあり殊に其東部興安嶺東の地は昔より特殊地域として重要視された所で、明はこゝに有名な泰寧、福餘、朶顏の三外衞、卽ち所謂兀良哈三衞を置き、此地の制馭は明、蒙古兩民族競爭の目標となり殆んど當時の南北對抗の大勢をも支配した點から見て重要な意味を有する。主として歷史地理的の研究で先づ三衞の四周を明にし初期に於ける明との關係に及び特に西隣蒙古との關係を詳述されて居る。

最後の「前漢の儒教と陰陽說」(津田)は漢代に入つて其面目を改めた儒教と陰陽說との抱合が如何にして又如何なる狀態に於て行はれ、それが儒教に如何なる變化を與へ儒教に如何なる新形態をとらしめたかに對する考察で此結合が思想として如何なる意義を有するかを尋ね更にそれが極端におし進められた前漢末期の時勢との關係に及んでる。(昭和五年八月、東京帝國大學文學部、岩波書店發賣、菊版、六二〇頁、價五・五〇)

【正誤】前號紹介欄中(六七五頁下段一一行) Albert Harnack とあるは Albert Hauck の誤につき訂正す。右は全く編者の不注意によるもの、記して筆者幷に讀者に深謝す。